

西神ニュータウン内の遺跡

中間報告 I

1972・11

神戸市

は　し　が　き

神戸市および明石市を貫流して、播磨灘に注ぎこむ明石川の中流域には、元住吉山遺跡、吉田・片山遺跡、王塚古墳など縄文・弥生および古墳時代の遺跡が数多く存在しております。

このような歴史的環境に囲まれ、いまなお静かな農村風景を残している神戸市垂水区押部谷町・平野町・檜谷町にまたがる地域に、神戸市が西神ニュータウンを建設することになり、当該地域内の遺跡確認調査が行なわれました。その結果数多くの遺跡が存在することが明らかになり、現在も調査は進行中であります。ここに第5次調査までの概要をとりまとめ、中間報告Ⅰとして刊行し、今後の遺跡保存への一助といたしたいと存じます。

1972年11月 神戸市教育委員会

目 次

1. 経 過	1頁
2. 位 置 と 環 境	2頁
3. 各 遺 跡 の 概 要	5頁
4. ま と め	30頁

—例 言—

1. 本書は、西神ニュータウン内埋蔵文化財第1～5次調査の概要である。
2. 本書は、喜谷美宣・中村善則・保田光雄・真野修が執筆編集した。
3. 本書の作成にあたっては、赤松啓介・河野通哉両氏の御指導をうけ、写真撮影にあたっては、徳永園治氏をわざらわせ、遺物実測は一部、兼康保明氏の協力を得た。
4. 遺物実測図はすべて縮尺 $\frac{1}{4}$ である。

西神ニュータウン内の遺跡 中間報告 I

I. 経過

神戸市では垂水区押部谷町、平野町、櫛谷町にまたがる山林地帯に西神ニュータウンを造成することになり、1970年4月に計画地域内の埋蔵文化財を分布調査し、8月より第1次確認調査を開始した。

第1次調査（1970年8月～9月）

（調査地点）1, 2, 3, 4, 5, 13, 16, 17, 18, 19, 20-1, 20-2, 20-3, 21, 22, 34, 35, 39

第2次調査（1970年12月～1971年1月）

（調査地点）30, 30-1, 31-1, 31-2, 32-1, 32-2, 37, 38

第3次調査（1971年2月～3月）

（調査地点）8, 9, 15, 23, 24, 26, 27, 33-3A, 33-4

第4次調査（1971年7月～8月）

（調査地点）33-1, 33-2, 33-3A, 33-3B, 33-5

第5次調査（1972年3月）

（調査地点）31-3, 42, 47, 49

以上、第5次調査までに計44地点の調査を行ない、なお第6次以降の調査を続行中である。

調査にあたっては、押部谷町高和、同町養田、平野町堅田、同町繁田、同町大畑、同町常本など地元の各位から種々御協力を得た。

記して感謝の意をさきげたい。

〈調査参加者〉

是川長（第1次調査団長）、河野通哉（第2次～5次調査団長）

赤松啓介、井上直樹、魚住ゆかり、浦川和子、太田利彦

大森忠夫、岡田哲、荻野雄二、奥田哲通、金島陽一、兼康保明

川田欣二、喜谷美宣、堺一朗、志水真澄、高木正見、谷端昭夫

田村康生、横上真理子、桶師隆興、辻内義浩、中村雅信、

中村哲則、東谷茂樹、広瀬義晃、藤井善年、坊垣俊郎、本田修平

松尾秀樹、松坂隆広、的野博、貞野修、三浦賢治、宮本郁雄

門前清、保田光雄、山田秀成、吉田邦夫、吉田浩幸

2. 位置と環境

a. 地理的環境

播磨平野の東を流れる明石川は、神戸市兵庫区山田町藍那附近に源を発し、古生層・第3紀層からなる山間部を西流し、しだいに流れを南へと変えながら中流部に移る。中流部では、洪積層からなる丘陵を浸蝕し、河岸段丘の発達した狭い谷平野を形成している。さらに下流部では、支流の櫛谷川、伊川と合流するが、河口附近の沖積平野は未発達である。

この様な、明石川流域の地理的特色は、六甲山系の上昇運動・明石海峡の速い潮流の影響によるものである。

調査地区の西神ニュータウン予定地は、明石川の中流域と櫛谷川にはさまれた、低い洪積丘陵で、神戸市垂水区押部谷町・平野町・櫛谷町にまたがる約900ヘクタールの地域である。

明石川流域は、地理的・歴史的に一つにまとまっているので、この地域における、古代史の変遷を略述しよう。

播磨における旧石器時代の研究はほとんど進んでおらず、不明な点が多いが、明石川流域の西に拡がる洪積台地上には、旧石器出土地が点在するので、この時代から、人類活動の舞台であったと思われる。

縄文時代には、前期の大歳山・中期の舞子浜・出の上・後期の元住吉山・時期不明の石器散布地が数ヶ所知られるが、遺跡の平面的関連および時間的関連は不十分にしかわからない。

弥生時代前期は、吉田・片山などの遺跡が知られる。これら前期の遺跡は、明石川河口附近の初期水稻耕作に適した沖積低湿地背後の洪積台地上に位置している。中・後期になると、新たな耕作地を求めて、集落は中流部へと逆上ってゆく。

農耕の定着が、共同体内部より首長層の発生を促し、栄・西神第40地点（第6次調査）のような弥生墳墓が出現し、次の時期に古墳が築かれるようになる。

前期の古墳はこれまでほとんど知られていなかったが、西神第44地点（第6次調査）のように、これまで後期古墳と考えられたものの中に4世紀に築造された古墳が含まれており、さらに今後も発見される可能性がある。前期後半から中期になると、伊川流域に狐塚古墳群、明石海峡沿岸に五色塚古墳群、明石川下流域に土塚古墳が形成される。

明石川流域の後期古墳は、後期初頭の木棺直葬墳が尾根上に点在する地域・木棺直葬墳と横穴式石室墳が混在する地域・横穴式石室墳が群集する地域に別れ、特異な分布を示している。これは、後期

b. 歴史的環境

旧石器時代

縄文時代

弥生時代

古墳時代



西神ニュータウンより雄岡山・雌岡山を望む

初頭の氏族祖的古墳は、明石川流域の各所に築かれるけれども、次の家族墓的古墳が築かれる時期には、古墳が築造される地域が何らかの規制をうけるためではないかと推定される。

古墳時代の集落址は、古墳の研究に比べてほとんど進行していない。また、明石川下流に認められる条里制と思われる地割は、この時期のものかもしれない。

古墳時代以降 7世紀になると、山陽道に沿って、太寺・長坂寺に巨大な寺院が創建されるが、古墳時代と同様に、この時期の集落もほとんど不明である。

明石川流域の丘陵に、平安時代後半の須恵器窯が多数築かれるることは、この時期の生産活動を知る上にも重要である。

西神ニュータウン附近の埋蔵文化財



明石川本流および櫛谷川流域の後期古墳（4頁参照）

群名	難岡山	金棒池	押部谷	西盛	日吉	細田			常本	印路			堅田				下村	向井		長谷			花岡山												
計	8	5	12	8	17	9			18	23			17				2	3		20			11												
支群名	神愛舞 宕岡 出山	金妙 椿見 池山	八押福 丁郎 池谷住	西西西 盛盛盛 ABC	妹ヶ丘 山	北日 岡 山	雄葉池寺守 跡谷谷谷 南谷ABAB	道 心 山	元 住 山	七 曲 9	古 野 池	御大少年 谷崩 保委 池造本所	少 ノ 新	久 印印 路路 A B	中 村 田	松 陰 田	堅 堅宮口中 田山山 杜山谷	南 奥 水 谷	宇 大 ノ 留 山	下 下 年 村村 AB	向 岩 井井 社	向 高 神 坂	長 上 山 井 谷	先 神 本	西若花 宮 神 谷山										
小計	3 2 3	3 2	1 4 7	2 3 3	5	4 13	1 2 1	2 2 1	3	4	7	3	1 3 11 3	3	10 13	2 3	2	12	3 3 7 4	3	5	1	7	5	1 1	1 2	3	1	7 6 7	3	1	4	3 3 5		
墳	前円 方 後墳	1																																	
	方 墳																		1																
形	円 墳	20 m 以上	1	1	1 1 3	1 1		2		1			2 1		7 11	1			1					2					1	2 1 2					
	10 m 10	3 2 2	2	3 4	1 2 3	5	4 11		2	4	7	3	1 3 8 2		3 2	1 2	2	11	3 3 7 3	2	5	1	7	5	1 1	1	2	1	7 6 7	3	1	3	1 2 3		
	10 m 以下																		1	1								1							
外	ハニワ	1											2 1			2	1	2	1							1	2								
部	フキ石												1																						
施	壙																		4	1															
内	木棺葬	3 1	3	1 4 7	2 3 3	5		1	2 2 1	2	3	7	3	1 3 11 3		9 13	3	2	12		3	5	1	7	5	1 1	1 2	3	1	7 6 7	3	1	4	3 3 4	
部	横穴式 石室	1 3	2				4 13		2 1	1	1					1																1			
主	箱式 石室																		2																
体	備 考																																		
地	図 番 号	1 2 3	4 5		6 7 8	9	10 11	12 13 14 15 16 17	18	19	20	21	22 23 24 25	26	27 28	29 30	31	32	33 34 35 36	37	38	39	40	41	42 43	44 45	46	47	48 49 50	51	52	53	54 55 56		

地図の記号 △…绳文時代 ◇…弥生時代 ●…古墳 □…古墳時代の集落

3. 各遺跡の概要

a. 第9号墳

東から西へ向って派生する支脈が小谷によって独立丘状を呈する尾根の東端にあり、最高所は標高約95mである。

墳丘は整形された地山と盛土で形成され、そのほぼ中央に、西神地区内で調査された古墳の中では最大規模の割竹形木棺の痕跡が発見された。

割竹形木棺の両木口板は長側板の外側にあり、棺底および棺側面には明瞭な朱痕が認められた。

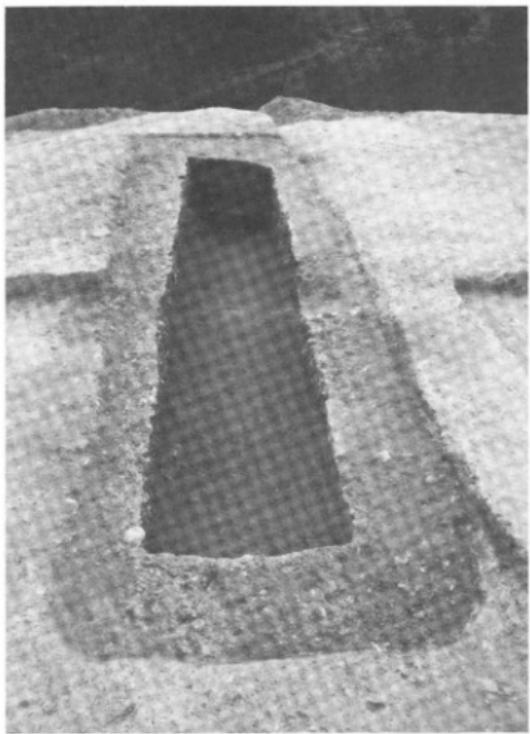
副葬品はわずかに鉄刀子（全長約13cm、柄の部分に木質部残存）1点で、北側木口板に近い棺底より出土した。また、掘形と棺の巾がともに北側が広く南が狭くなっているところから、北側に頭部を置いて埋葬されたものと推定される。

鉄刀子以外の遺物としては、流土中より出土した若干の須恵器片と、鉄製品が1点あるだけである。しかし、この古墳に伴うものかどうかは不明であるが、北西部の墳丘外斜面より朱が入っていたと考えられる須恵器壺（頸部径10cm、胴部径22cm、頸部以上欠損）が出土した。

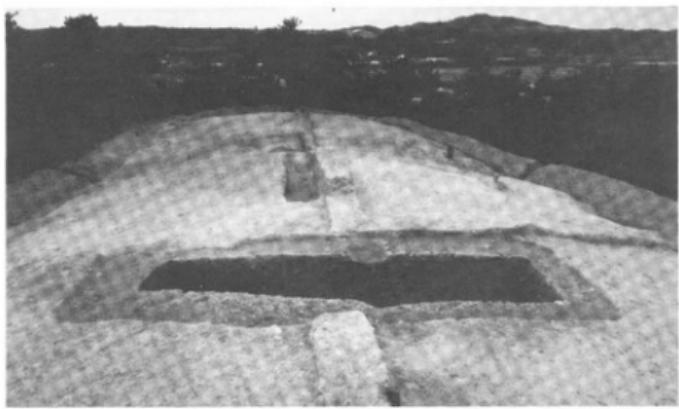
なお南西部緩斜面の墳丘に近接した地点で焼土（長さ1.6m、巾0.4m、厚0.3m）の広がりが検出されたが、その性格は明らかでない。



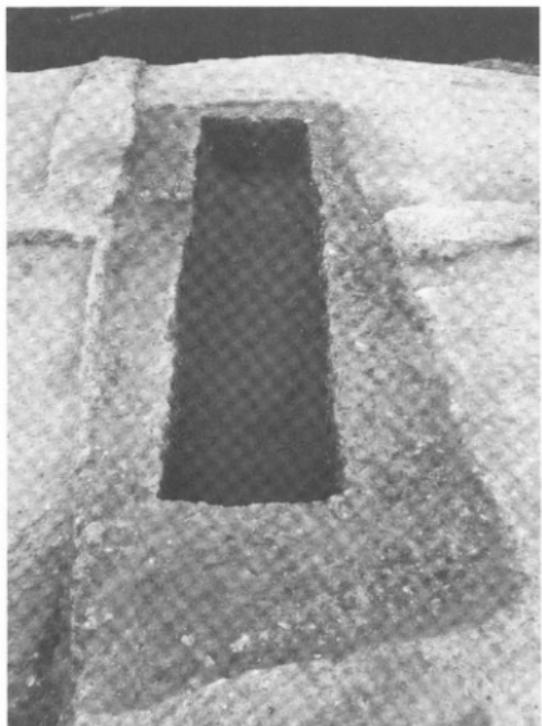
第9号墳遠望(西南より)



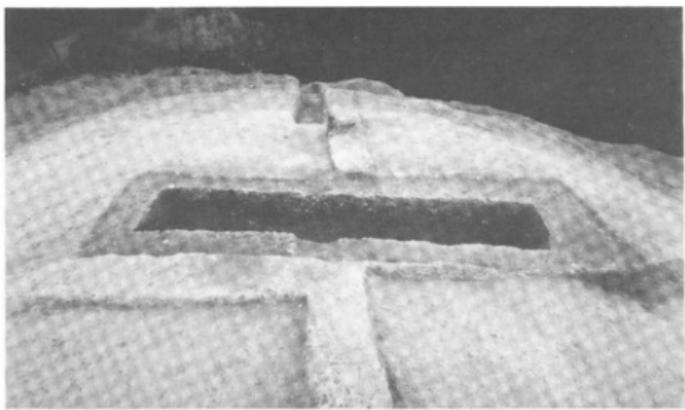
第9号墳内部主体(北より)



第9号墳内部主体(東より)



第9号墳内部主体(南より)



第9号墳内部主体(西より)

b. 第18号墳

第18号墳および第19号墳は、養田集落の南端から南へおよそ250mの地点で、北側より派生する尾根上にあり、南側は広い谷を形成している。

標高約100mの地点にあり、調査前は長さ約10m巾約7mの範囲にわずかに隆起が認められた。

調査の結果、隆起中央部付近、表土下10cmで地山を掘り込んだ東西2.6m南北1.3m深さ10cmの掘形と、その内側に長さ1.7m巾60cm深さ5~10cmの木棺の痕跡が認められた。

遺物は、掘形内南側に須恵器の壺が置かれた状態で発見された。また、表土中より須恵器环片と、長さ13cmの刀子状鉄器が発見されている。

墳丘は、流失が激しく旧状を知り得なかった。



第18号墳内部主体(東より)

c. 第19号墳



第19号墳出土

標高約105mの地点にあり、調査前は西側斜面および山道に須恵器片が散乱し、南北約15m東西約10m高さ約30cmの隆起がみられた。

調査によって、隆起中央より西へ約1mの地点で、表土下約15cmのところで須恵器の有蓋高環壺が発見された。地山直上およびこの遺物に付着して若干の朱が認められたので、この面が棺底にあたるものと考えられる。しかし主体部の落込みは検出されなかった。

一部に盛上が遺存しており、径約6.5mの円墳と推定される。

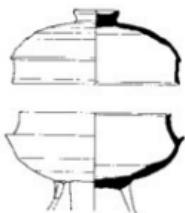
d. 第20号墳 第19号墳より南東へ下ってゆく尾根上に位置し、この地点より、南西下およそ400mに上堅田集落を望むことができる。標高は約97.9mを計る。

第一主体 尾根西側のゆるやかな斜面にあり、表土下5cm程で地山を掘り込んだ巾1m（長さ不明）深さ5cmで西側へのびてゆく落込みが検出された。この内部より須恵器の有蓋高杯片と少量の环片が発見された。

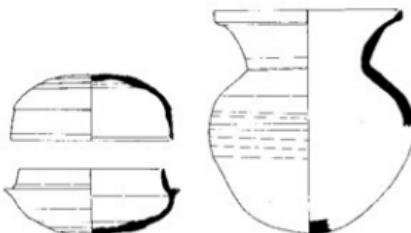
第二主体 第1主体より西約1mの地点で、表土下10cmで南北に約1mの落込みが検出された。（巾、長さとも不明）落込み内に巾25cmの朱の帯が西へ延びている。（長さ不明）遺物は、落込み内に長さ50cmの鉄刀1本。木部残痕の良好な鉄鏃3本が発見された。

第三主体 第1、2主体より東へ約5mの尾根平坦部にあたる。表土下約20cmで南北3.15m東西1m深さ20cmの落込みが検出された。遺物は、落込み中央付近の東壁際に横転した須恵器の小型壺と、西壁際に須恵器壺5個（セットをなす）と、土師器の堆が発見された。土器間が約50cmの間隔をもっているので、その間に木棺を安置したものと推定される。

第1、2、3主体とも墳丘は流失してしまっているため、規模、前後関係は不明である。



第20号墳第1主体出土



第20号墳第3主体出土

e. 第30-1号墳

東から西にのびる大きな尾根上の標高約110mの地点にあり、他地点の古墳に比して平野部からやや奥まったところにある。眺望はよく雄岡・雌岡両山をはじめ、遠く明石海峡もわずかであるが望むことができる。

墳丘は、南西部が大きく崩れているほかは比較的良く残っていた。

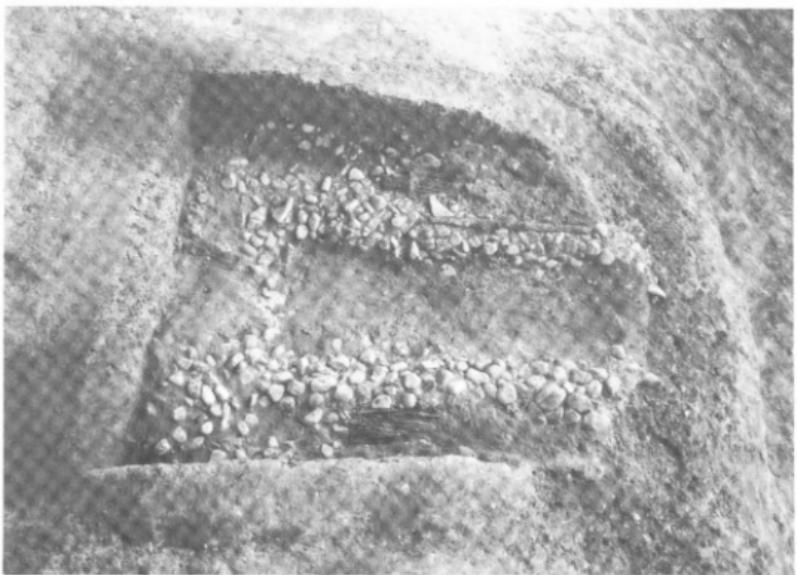
主体部は、墳丘のほぼ中央部の1ヶ所だけで、埋葬は二重の掘形を掘って行なわれており、下部は地山を掘りこんでいる。短軸方向の断面では、地山は両端が少し落こみ溝状になっており、その埋土には礫が混入していて、排水溝ではないかと推定される。

棺は地山上に粘土床をつくりその上に置かれたようで、棺側には礫床があった。礫床は粘土をひいた上に形成されており、礫のまばらな部分で粘土があらわれており、礫床とともに朱痕が検出された。

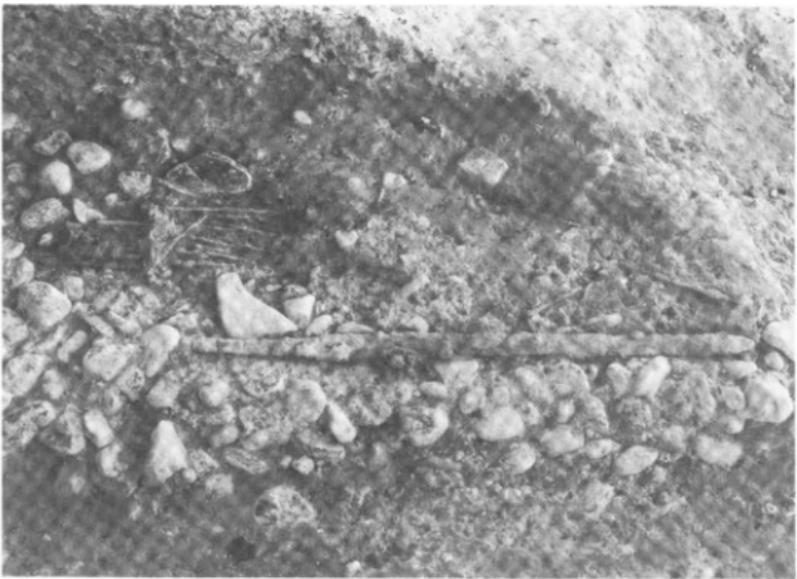
副葬品は、南・北の礫床上に置かれており、南側には鉄剣（長さ65cm刃幅13cm）と束ねられた鉄鎌（長さ20cm）が棺と平行に置かれていた。なお、鉄鎌は剣の周囲にも数本が散在していた。北側には束ねられた鉄鎌28本が置かれていた。主体外から遺物は全く出土していない。



第30-1号墳遠望(東より)



第30—1号墳内部主体(北より)



第30—1号墳鐵針および鐵鎖出土状況



第31-3号墳遠望(東より)

f. 第31-3号墳

第30-1号墳をへて西方へ続いてきた尾根が、北と南西の二方向に別れるあたりの北側尾根西側の斜面にあり、標高約90mの地点である。

主体部は流失してしまったようで検出されなかつたが、周溝らしきものが墳丘の北東および南西部において検出された。周溝付近の流土から多数の須恵器片が出土した。

墳丘の東部には、盛土を切り込んだ徑約80cmの不整円形をした墓塙があり、その内部より近世の素焼きの灯明皿にうわ葉のぬられた小形の土器が伏せられた状態で出土し、古墳が後世に墓地として再利用されていることが明らかになった。

墳丘、遺構について不明な点が多く再調査を予定している。

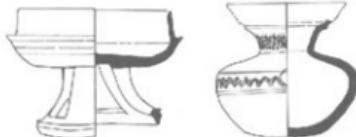
g. 第32-1・2号墳

南から続いてきた尾根が一段落してさらに北へ続くその突端部に

あり、西方の宮山ごしに眺望が開けた標高約100mの地点である。

第1地点はこの突端部の少し南側の部分にあり、第2地点は突端部にある。両地点ともほとんど墳形をうかがい知ることができないほどに墳丘は流失しており、わずかに遺物の散布状態から古墳と認めることができた。

第1地点の南西部は小規模な崖になっており、遺物はこの崖下付近および崖の上の狭い平坦部より出土したが、多くは須恵器の細片であり完品に近いものは平坦部に限られていた。平坦部では遺物の南側に主体部の痕跡らしき浅い長方形の落込が検出された。

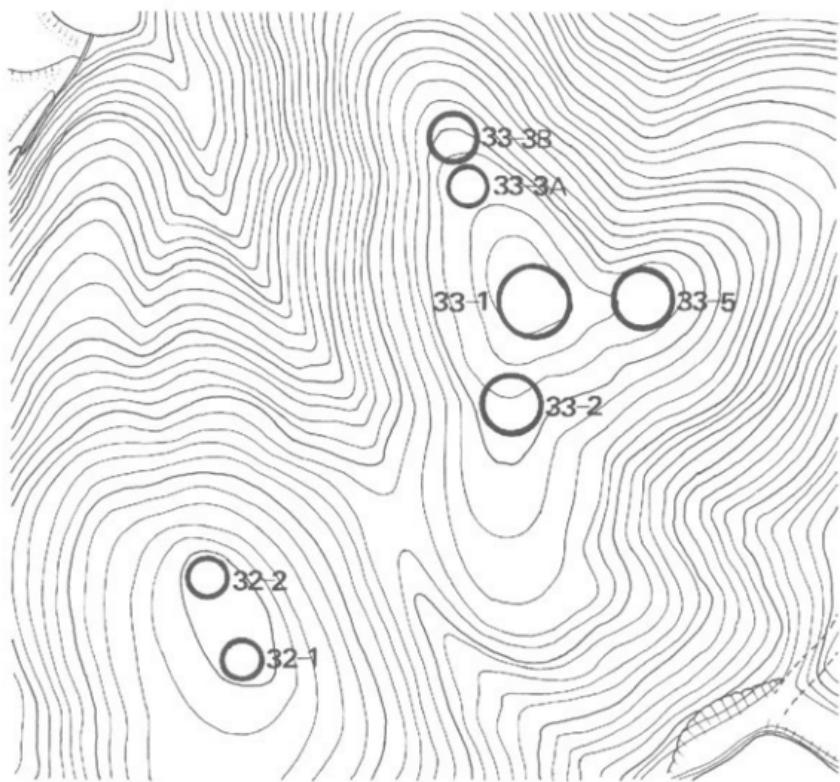


第32-1号墳出土

第2地点では頂上部付近の地山直上の流土中より土師器、須恵器の細片が多数出土した。しかし、その付近には遺構らしきものは検出されなかつた。



第33号地点遠望(北より)



第32～33号地点古墳分布図($S = 1/1000$)



第33—1号墳全景(北より)

h. 第33—1号墳

第32号墳から続いてきた尾根が、北と北東の二方向に別れて谷へと下っていく。その付け根部分、標高約96mの地点にあり、眺望は北西側にひらけている。

口山の谷の古墳群の中心に位置し、墳丘規模は最大である。墳丘の基底部は地山を整形して利用し、その上に盛土がなされている。墳體部分は地山の傾斜が少しうるやかになっているだけで、周溝は認められなかった。

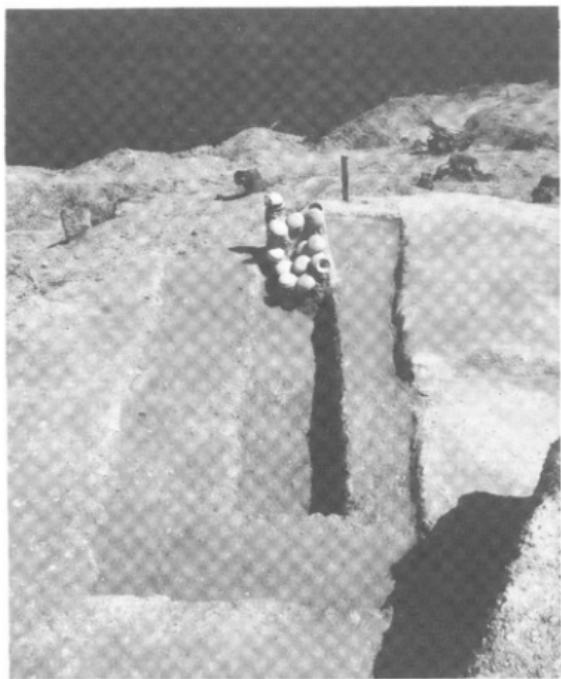
主体部は箱形の木棺で、墳丘の中心部より約2m北へ寄ったところにその痕跡があり、掘形は盛土より掘りこまれているが、下部は若干地山を切りこんでいる。

主体部より出土した遺物は、棺の東端に置かれていた一群のみであり、これらは棺の短側面上に置かれていたものが、棺内に倒れこんだような状態で出土した。この、土器群中の蓋坏セットの1つには土師器底が入れられているものがあった。

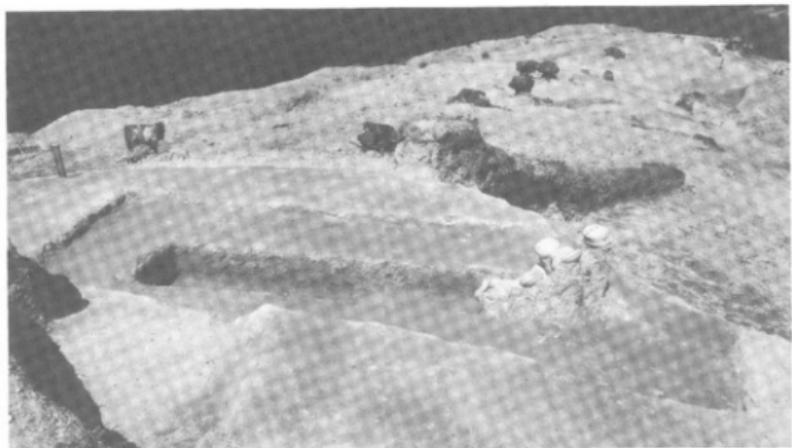
墳丘の北西部および北東部斜面では流土中より多数の土器片が出土したが、土師器片はほとんど北西部斜面に限られていた。



第33—1号墳内部主体出土



第33-1号墳内部主体(西より)



第33-1号墳内部主体(南より)



第33号地点全景(南西より)

i. 第33-2号墳

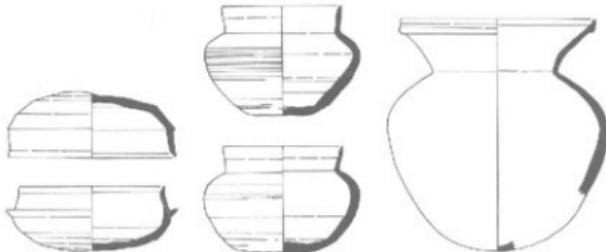
第33-1号墳の南約19mにあり、標高は約95mを計る。眺望は南北が第32号墳および第33-1号墳によって遮られあまりよくないが、わずかに北西部に平野部が望める。

墳丘にはいくつかの盗掘塹が存したが、墳形はよく原形を留めていた。しかし、主体部はほとんど盗掘によって破壊されており、部分的に掘形らしきものが残っていただけであった。盗掘塹より副葬品と考えられる鉄刀子1点が出土した。

墳丘の北側には明瞭な周溝が存在したが、他の部分にはなかった。ただ、墳施に沿って巾約1mの地山の平坦面があり、地山整形による区画内に古墳が築造されたことが明らかになった。

北西の墳麓部には、墳丘が長さ約2mにわたってカットされ、その平坦面に2群に別かれて計30個の土器が置かれていた。これらの土器は主体部の埋葬に伴う祭りの際に埋置されたものと考えられる。

その他の遺物としては多数の須恵器片が、周溝の埋土より出土している。



第33-2号墳墳麓出土



調査前の第33-2号墳(北東より)



第33-2号墳全景(北より)



第33-2号墳墳麓の土器群

j. 第33-3 A号墳 第33-1号墳から北へのびる尾根上にあり、同地点より約23mのところにある。墳頂部は平坦になっており標高約92mで、眺望は北西にひらけている。

墳丘は大部分流失してしまっており、主体部は検出されなかったが、地山を掘りこんだ周溝の遺存状態は良好で墳丘の南半分をめぐっていた。とくに第33-1号墳へ続く尾根部分の溝は深く顯著であった。

東南部の周溝内には鉄錠と計26個の土器が埋置されていたが、そのうちに、須恵器の蓋抔セットの内に土師器塊が入れられているものや、巻貝を数個入れているものがあった。また、この土器群の東端に置かれていた大甕は、破片が点々と溝底に散乱しており、溝が埋まる以前に壊れて流れた状態を示していた。

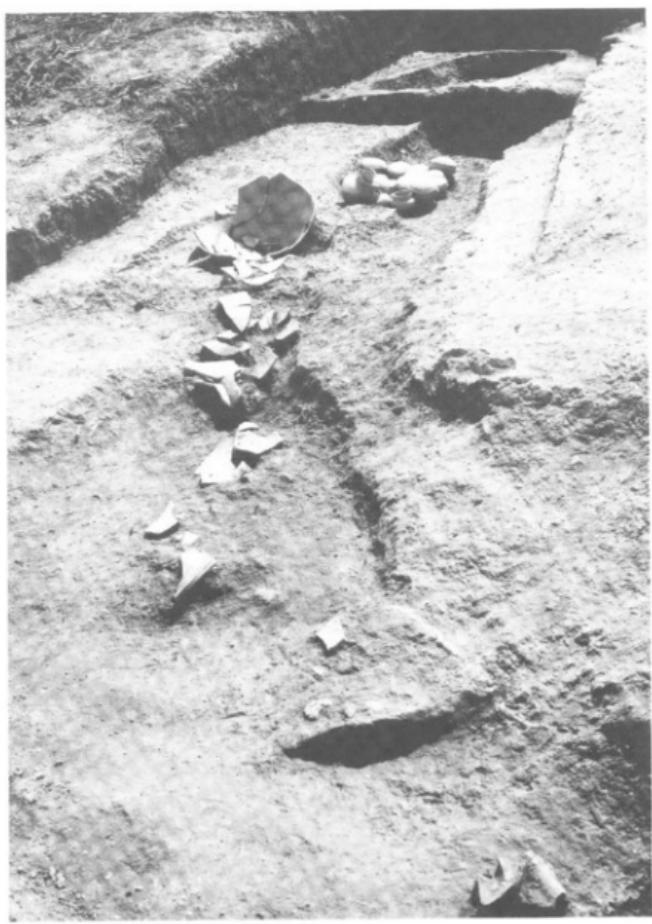
墳丘東部の周溝外には、地山を掘りこんだ径60cmほどの円形の掘形内に、須恵器の甕棺が埋置されていた。この甕棺内には鉄刀子（長さ11cm）1点が副葬されていた。この甕は細かく割れて内側に倒れこんだ状態であったが、それらの土器片のなかに甕棺の蓋として使用されたと推定される坏蓋が認められた。この坏蓋は周溝内の土器群中のものと比べると時期が若干下るもので、甕棺がこの古墳築造以後のものであることを示している。その他の遺物としては流土中より、碧玉製管玉や多数の土器片が出土した。



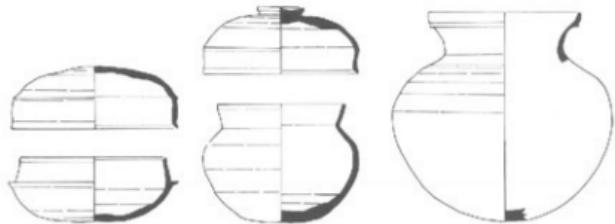
第33-3 A号墳周溝外の甕棺蓋



第33-3 A号墳周溝外の甕棺



第33—3 A号墳周溝内土器群

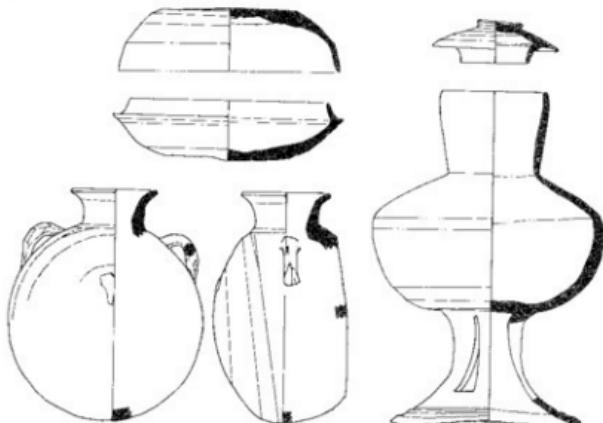


第33—3 A号墳周溝内出土

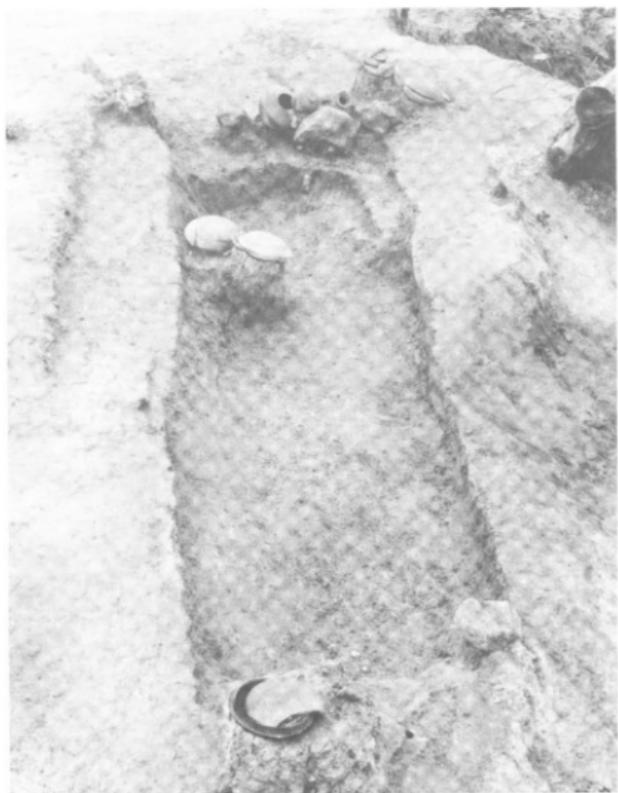
k. 第33-3 B号墳 第33-3 A号墳の北部に隣接しており、墳頂部は標高約90mで平坦になっている。

埋葬は墳丘北東部にかた寄っていたが、中央部にも埋葬が存在したと推定される。この北東部にある埋葬についても、上部は流失しており棺と掘形の下部が残存していただけである。この棺と掘形の巾はいずれも北西部がやや広くなっている。頭部を北西に置いて埋葬されたと考えられる。また、棺の両長側には長さ2m巾50cmほどの情状に朱の痕跡があった。この埋葬に伴う土器類は、第5次調査までに出土した古墳時代の須恵器としては最も新しい時期のものである。これらの土器類は、棺内より蓋壺セット2個、南東部掘形内より蓋壺セット1個、他はすべて北西部の掘形の外側より出土したが、北西部にあった土器は近接した北側斜面より出土した多くの土器片とともに、土器群を形成していたものと推定される。なお、北西部の土器の近辺には人頭大の河原石が数個置かれていた。

周溝は第33-3 A号墳と接続する南側と北側の一部にしか残存していないかった。周溝内埋土からは、北側から土師器片が、南側から須恵片が多数出土した。その他の遺物としては流土中より鉄鏨が1点出土している。



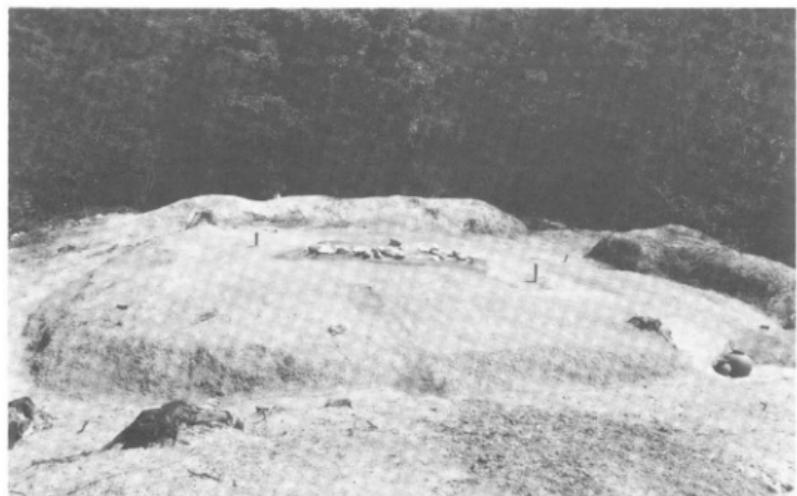
第33-3 B号墳内部主体出土



第33-3 B号墳内部主体(南より)



第33-3 Aおよび3 B号墳全景(南より)



第33-5号墳全景(西より)

1. 第33-5号墳

第33-1号墳から北東に派生する尾根上で、同地点より約23mのところにある。墳頂部は標高約95mで平坦になっており、北に眺望がひらけている。

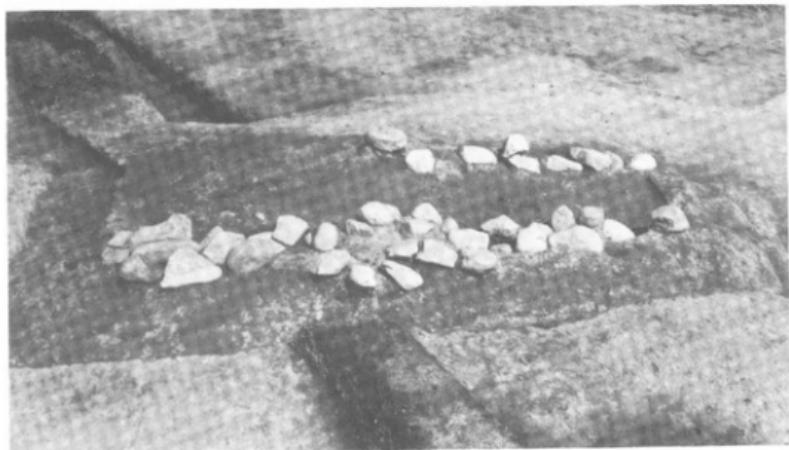
内部主体は墳丘の中央部に一ヶ所認められたが、上部は墳丘とともに流失していた。埋葬は木棺直葬であり、棺の両長側に沿って径20cm前後の河原石が積まれていた。河原石は棺底とほぼ同じ高さより積まれていたが、部分的に2段積みが確認されただけで、埋葬時に何段積み上げられていたかは明らかでない。なお、棺底にはほぼ全面にわたって朱痕が認められた。また、掘形の内外に焼土の狭い広がりが認められた。

棺底の二ヶ所よりガラス小玉が出土したが、北端から約50cmのところからは径4mm前後のもの、1.8mのところからは径1cm程度のものと大きさの異なった二種類が認められた。しかし、色は両者ともに紺と青が混っていた。その他棺内北側より須恵器片が1片出土している。

周溝は墳丘のほぼ全周をめぐっていたが、とくに第33-1号墳に続く側の尾根を深く切断していた。そして南西部の周溝内からは、周溝底に並んで置かれていたと推定される須恵器の壺と甕が出土した。また、周溝内埋土からは多数の須恵器片と土師器片、それに石鏹が1点出土している。



第33—5号墳内部主体(南より)

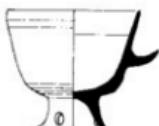


第33—5号墳内部主体(西より)

m. 第38号遺跡

第38遺跡・第39号墳は、南東より長く張りだしてきた尾根の先端部近くにあたる。200m程北東に下堅田集落、西に繁田集落を臨むところに位置する。

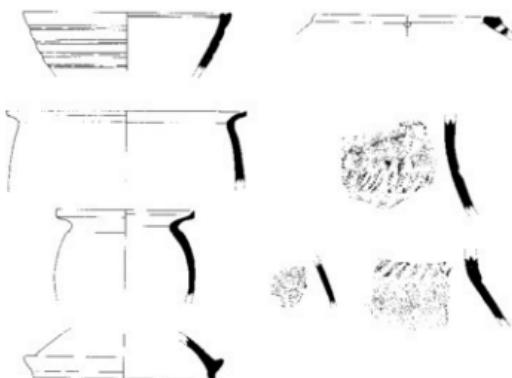
標高約83mの尾根で、調査前は、平坦をなし古墳状隆起は認められなかった。



第38地点出土

調査の結果、遺構は何ら検出されなかつたが、この地点南側半分において表土下より多数の弥生式土器片（第IV様式）が発見された。また、須恵器は把手付カップ形土器と少量の破片が発見された。

弥生式土器の形態は、木器型高杯、無頭壺、甕、台付鉢などや、口縁部に凹線文、頸部には指圧突帯文、胴部には波状文などを施した壺が認められる。



第38号遺跡出土弥生式土器

n. 第39号墳

標高約82mの地点にあり、調査前は、一辺約10mの三角形の隆起が認められた。

調査によって、東側斜面付近の表土下10cmで長さ約3m巾50cm深さ30cmの掘形（遺構が一部東斜面に延びているため長さは不明）と、その内側に長さ1.9m巾20~30cm深さ15cmの、不整形な落込みがみられ、割竹形木棺の痕跡と推定された。

遺物は、掘形内南壁際に長さ1.1mの鉄刀1口と、遺構の上面に1束になった鉄鎌15本が発見された。またこの地点の中央部には、土師器の高杯片が散乱していた。墳丘は流出してしまっているため、規模は不明である。

○. 第42号墳

東から西へのびる尾根が平野近くで、南西へ支脈を形成しているあたりの標高約94mの地点に位置し、墳丘の北側は急な斜面となつて低い尾根につづいており、古墳からの眺望は極めて良好である。

墳丘の中心部よりやや北東に寄った地点に主体部が認められたが、盛土とともにほとんど流失しており、わずかに握形の下部が残っていた。

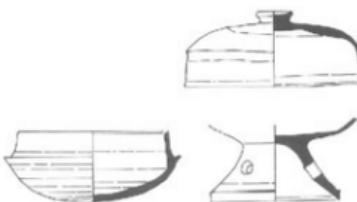
墳丘の南側では周溝の一部が検出され、その埋土より多数の須恵器片が出土したが、周溝の全貌は明らかにできなかった。

墳丘は地山を整形して盛土されたと考えられるが、墳丘北東部の地山斜面より、地山を掘りこんで埋置された弥生時代の壺棺が検出された。握形は上部は流失していたが、壺棺ぎりぎりの大きさで、長径約50cmの不整楕円形であった。壺は南西にその口縁を向け横だおしの状態で埋置されており、口唇部および口縁部には凹線文がめぐらされ、頭部に指圧突帯が貼りつけられ、胴部に刷目が施された畿内第IV様式に属するものであった。なお、頭部以上の半分は埋置

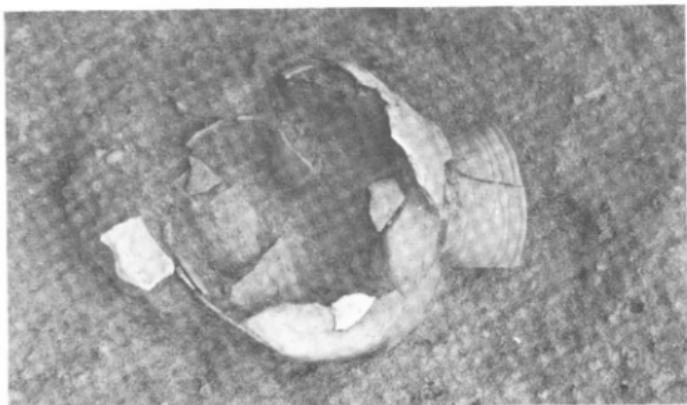
された時点より欠いていたらしく出土しなかった。

そのほか流土中より1片の弥生式土器片と多数の須恵器・土師器片が出土している。

この古墳は墳丘の形や規模において不明な点があり、今後再調査を予定している。



第42号墳周溝出土



第42号地点壺棺出土状況

南から北へのびた尾根の長さ約30m・巾8m程度の広がりをもつ、標高約87mの平坦な地点にある。東側は谷に面し、西側は斜面をへて平野部につらなり眺望がひらけている。

この平坦部で、地山を掘りこんだ土塹1・墓塚11の合計12ヶ所の遺構が検出されたが、それらは南側部分・中央部分・北側部分の三地域に別かれていた。(巻末附図参照)

南側部分には矩形の平面をもつ性格不明の土塹が1ヶ所発見されただけであり、遺物は全く発見されていない。

中央部分の3つの墓塚のうち、第2号墓塚は第3号墓塚によって切られており、両墓塚の埋土よりほぼ1個体分の弥生式土器(壺)が発見された。口唇部に波状文、胴部に刷目が施された畿内第3様式に属するものである。また、第4号墓塚では箱形木棺の痕跡が検出された(棺長約1.7m・巾0.6m)。

北側部分では遺物を全く伴なわない8つの墓塚が検出されたが、それらがすべて尾根とほぼ直交する同一方向に長軸をもつことや、それぞれの位置関係から、箱形木棺の痕跡(長さ1.9m・巾0.5m)が検出された第8号墓塚を中心とした集団墓であると考えられる。しかし、各墓塚の先後関係については、第8号墓塚が第9号墓塚より先であることと、第11・12号墓塚が切り合い関係によって第11号墓塚が先であることが判明しただけである。

この地点からの出土遺物は非常に少なく、上記の遺物の他には、わずかに擾乱塙より1片、流土中より1片の弥生式土器片が出土したのみである。

	遺構	長さm	巾m	深さm
1	土 塹	2.5	2.0	0.2
2	墓 塚	2.1		0.3
3	墓 塚	1.7	0.7	0.1
4	墓 塚	2.6	1.4	0.5
5	墓 塚	2.4	0.8	0.3
6	墓 塚	1.0	0.4	0.2
7	墓 塚	1.7	0.7	0.3
8	墓 塚	2.5	1.0	0.4
9	墓 塚	1.4	0.6	0.3
10	墓 塚	1.2	0.5	0.2
11	墓 塚		1.2	0.2
12	墓 塚	1.3	0.5	0.4

第47号遺跡遺構計測値



第47号遺跡全景(北から)



第47号遺跡第2墓塚出土



第47号遺跡第4墓塚(西より)



第47号遺跡第8墓塚(東より)



第47号遺跡北側墓塚群(南より)

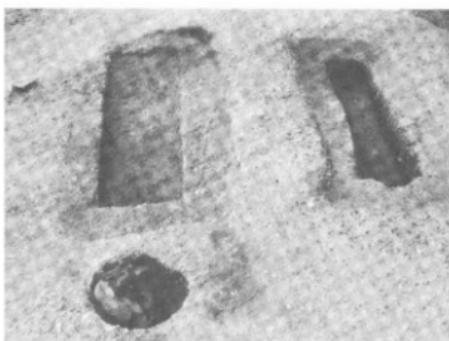
付載(第6次調査分)

q. 第40号遺跡

北東から南西にむかってのびてきた尾根の先端に2基の弥生墳墓がならんでいる。墳丘はそれぞれ地山を、1辺9mと6mに整形し、さらに盛土を施していた。両墳墓とも3つの埋葬が認められ、東側墳墓では、長さ約1.6m・巾0.4mおよび長さ約2.3m・巾0.4mの箱形木棺の痕跡をもつものと、長さ約75cm、巾145cmの小さな墓壙が検出された。西側墳墓でも、長さ約1.9m・巾約0.4m、長さ約2.3m・巾0.6mの2つの箱形木棺の痕跡が認められ、さらに、長径約50cmの楕円形の掘形に、木器形高坏で蓋をした弥生時代(第4様式)の斐棺が埋置されていた。



第40号遺跡全景(東より)



第40-2号墳墓主体全景(東より)

r. 第44号墳

第47号遺跡より北へ派生した尾根の突端部に位置する古墳である。推定一辺8mの方墳で、内部主体は、長さ2m・巾0.4mの割竹形木棺であり、副葬品は、棺内からヤリガンナと思われる鉄器、棺外から鉄剣が出土した。なお、主体部直上から、底部を穿孔したと推定される土師器（複合口縁の壺）が出土し、土器の様式から、4世紀代の古墳と推定される。また、この古墳の南側にもほぼ同時期と推定される古墳が2基存在する。



第44号墳内部主体(北より)

4. ま と め

以上述べてきたように西神ニュータウン内の調査対象地点は約100ヶ所あり、そのうち第6次調査分を加えて47ヶ所の調査を行った。

調査された遺跡のうち最古のものは、畿内第3様式新の弥生式土器が出土した第47号遺跡である。続いて第4様式の土器が出土した第38号遺跡・第40号墳墓・第42号壺棺がある。

これらの遺跡に続くものとして、複合口縁の古式土師器を出土した前期の第44号墳、そして、5世紀代の古墳と考えられる第30-1号墳・第9号墳・第39号墳とあいついで築造されたのであろう。

調査された遺跡で最も多いのは五世紀末～六世紀に属する古墳群である。それらの後期古墳から出土した須恵器によって、相対的関係を考えると、まず、第18号墳・第33-2号墳・第33-3A号墳・第33-5号墳がほぼ同時期に築造され、続いて第19号墳・第20号墳・第32-1号墳・第33-1号墳が築造されたと考えられる。そして少し時間を置いて六世紀後半に第33-3B号墳が造られたと考えられるが、その中間に埋めるものは第33-3A号墳の周溝外葬棺ではないのかと考えられる。

以上のように西神ニュータウン地域は、弥生時代中期から古墳時代後期に至る遺跡が多数存在し、明石川流域ひいては東播の古代史を考える上で重要な意味をもつ地域である。今後の調査が進行すればさらに数多くの重要な遺跡が明らかになるであろうが十分な保存処置がなされることを切望したい。



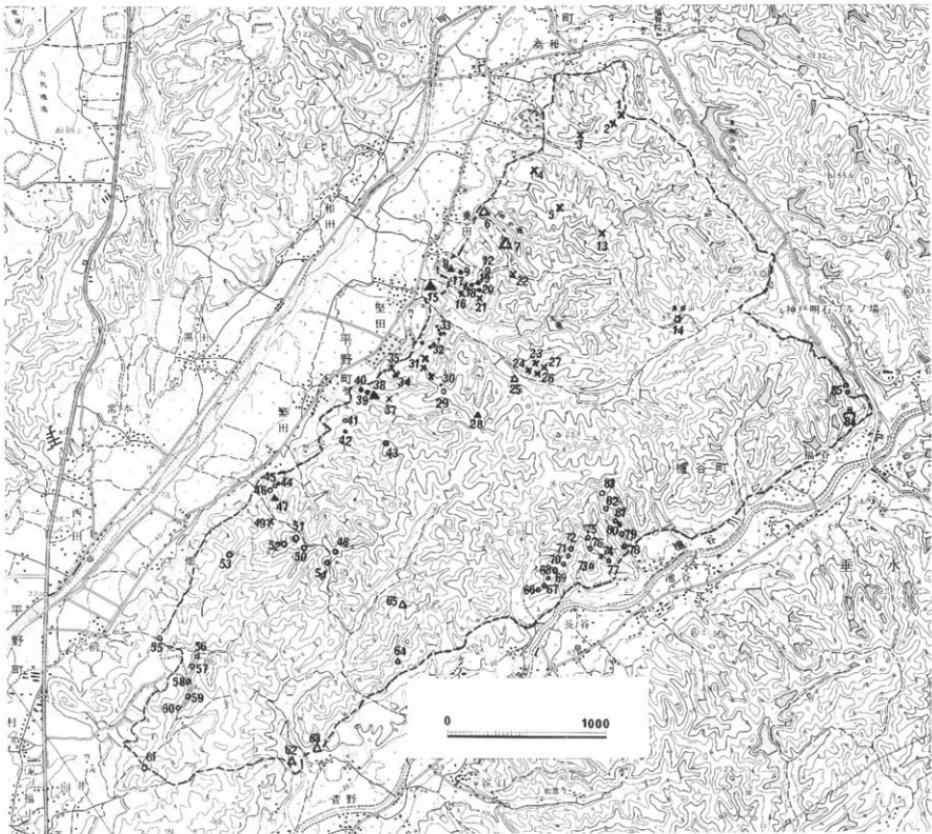
第40-2号墳墓出土の壺棺（南から）

西神ニュータウン内の遺跡(未調査分)

西神ニュータウン内の遺跡分布図

No.	地名	種類	出土品	参考
6	坪谷	墓地	北古墳地	土師器・須恵器
7	坪谷	墓地	山古墳地	弦文式土器・土師器
10	坪谷	墓地	下坪内古墳	
11	坪谷	墓地	上坪内古墳	
12	坪谷	墓地	上坪内古墳	土師器・須恵器
14	篠谷	古墳	高塚山	土器
25	平野	堅田	高山の谷	放布土器
29	平野	堅田	中山の谷	古墳地 ハニワ
36	平野	金保	白舞谷	古墳地
40	平野	堅田	大年	乳牛頭器
41	平野	堅田	大年	古墳地
43	平野	堅田	大年	古墳地
44	平野	堅田	大年	古墳地 十輪器・铁器
45	平野	堅本	向井	古墳地
46	平野	堅本	向井	古墳地
48	平野	堅本	南水	古墳地 頂窓器
50	平野	堅本	南水	古墳地 ハニワ
51	平野	堅本	南水	古墳地 頂窓器
52	平野	堅本	南水	古墳地 頂窓器
53	平野	堅木	の谷	古墳地
54	平野	堅木	水谷	古墳地 ハニワ・須恵器
55	平野	河前	大年	古墳地 土師器・須恵器
56	平野	河前	大年	古墳地
57	平野	河前	大年	古墳地
58	平野	河前	大年	古墳地
59	平野	河前	大年	古墳地
60	平野	河前	大年	古墳地 陶器
61	平野	河井		古墳地
62	塙谷	河谷	若高神社	放布地 頂窓器
63	塙谷	河谷	手	放布地 サマクイト・芯火六丁目 頂窓器
64	塙谷	河木	塙木	古墳地
65	塙谷	河木	放布地	サマクイト
66	塙谷	河谷	内川	古墳地
67	塙谷	河谷	内川	古墳地
68	塙谷	河谷	内川	古墳地
69	塙谷	河谷	内川	古墳地 土師器
70	塙谷	河谷	内川	古墳地
71	塙谷	河谷	内川	古墳地
72	塙谷	河谷	内川	古墳地
73	塙谷	河谷	上塙井谷	古墳地 ハニワ・須恵器・須恵器
74	塙谷	河谷	上塙井谷	古墳地 頂窓器
75	塙谷	河谷	上塙井谷	古墳地 ハニワ・土師器・須恵器
76	塙谷	河谷	上塙井谷	古墳地
77	塙谷	河谷	上塙井谷	古墳地 頂窓器
78	塙谷	河谷	上山の池東	古墳地
79	塙谷	河谷	上山の池東	古墳地
80	塙谷	河谷	上山の池東	古墳地
81	塙谷	河谷	上山の池東	古墳地 土師器
82	塙谷	河谷	上山の池東	古墳地 土師器
83	塙谷	河谷	上山の池東	古墳地
84	塙谷	河谷	高槻神山	城址
85	塙谷	河谷	東山	古墳地

地図の記号 ●▲× 潜在窓 □ 未調査



卷末付表(一) 西神ニュータウン内の遺跡(調査分)

卷末付表 2-1 西神ニュータウン内の遺跡出土遺物一覧(調査分)

地点	出土場所	発生式 土 器	土 器	土 器	土 器	須	患			器	鉢	刀	劍	劍	その他の不明	鉢形不明	刀子	その他の不明
							高 身	身 蓋	高 身 蓋									
8	石敷溝決道構 造	土	土	土	土	○					○							
9	流	土	土	土	土					○	○				○			
15	墳丘外斜面	土	土	土	土					1	○							
16	第2・3・4層	土	土	土	土													
18	主 体 部	土	土	土	土													
19	主 体 部	土	土	土	土													
20-1	主 体 部	土	土	土	土													
20-2	主 体 部	土	土	土	土													
20-3	主 体 部	土	土	土	土													
28	火葬場	土	土	土	土													
30-1	主 体 部	土	土	土	土													
31-3	近世土塁墓	土	土	土	土					○								
32-1	主 体 部	土	土	土	土					○	○				○			
32-2	主 体 部	土	土	土	土					○	○				○			
33-1	主 体 部	土	土	土	土					1	○	2	13			1		

卷末付表2-2

第47号遺跡遺構配置図

